『九州産業大学国際文化部紀要』，第81号，15-38，2023
Journal of the Faculty of International Studies of Culture No.81, 15-38, 2023

【論文】

明治期のニーチェ主義と教育学（1）

―非学問的なニーチェ思想の学問化―

松　原　岳　行

はじめに

そもそもニーチェ（Friedrich Nietzsche, 1844-1900）は、ペスタロッチやフレーベルのような教育家でもなければ、カントやヘーゲルのような体系的哲学者でもなく、その意味においてまさしく非「教育」「学」的な存在である。その一方で、近代日本を代表する教育学者たちがほかならぬニーチェ思想を受容しようとしてきたことも事実である。

たとえば中島半次郎（1871-1926）は1914年の著作『人格的教育学の思潮』においてニーチェの教育観を「個人的教育学」と特徴づけ[註1]、小西重直（1875-1948）は1917年に「ニイツエの学制論」という論文を発表し[註2]、篠原助市（1876-1957）は1922年に出版した『教育辞典』に「ニーチェ」の項目を載せ[註3]、長田新（1887-1961）は1931年の著作『教育思想史』の中でニーチェをディルタイとともに「生の哲学者」と高く評価したわけだが[註4]、彼らはドイツから日本へとニーチェの思想が輸入されはじめた19-20世紀転換期以降にちょうど青少年期を過ごし、後にニーチェ思想の教育学的意義を検討したのである。

ここで興味深いのは、ドイツと同様、日本においても、教育学を含むアカデミズムによるニーチェ受容が本格的に開始される前段として、青年世代を中心にいわばニーチェブームとも言うべきニーチェ主義の流行現象が興っているという事実である[註5]。まだ全く評価の定まっていなかったニーチェ思想に対して当時の日本人たちはどのような反応を示し、どのようなプロセスを経てニーチェ思想を学問的に評価していったのだろうか。日本の教育学におけるニーチェ受容史を解明する上で、その前史として明治期のニーチェ主義の特質と意味を検討することはきわめて有益であろう。

さて、日本におけるニーチェ主義の流行は、1901年8月に発表された高山樗牛の「美的生活を論ず」とそれに対する長谷川天渓の論駁「美的生活とは何ぞや」に端を発した、いわゆる「美的生活論争」として展開され、従来の研究においてはもっぱら「文学」の視点から、高山樗牛

／林次郎（1871-1902）・登張竹風／信一郎（1873-1955）を中心とするニーチェ主義者vs.坪内逍遙／雄蔵（1859-1935）・長谷川天渓／誠也（1876-1940）ら早稲田大学関係者を中心とする反ニーチェ主義者の構図によって説明されてきた（西尾 1977、Becker 1983、湯浅 2007、杉田 2010）。

しかし、ニーチェ主義とその流行が同時代に及ぼした意味を解明するためには、美的生活論争の主役を演じた高山・登張／坪内・長谷川だけではなく、同時期にニーチェについて発言したその他の論者にも目を向け、いわば中心と周縁から多角的にニーチェ主義を捉える必要があろう。これらの考察を通じて、いわゆるニーチェ主義論争が明治期における日本のアカデミズムに対してどのような意味や作用を与えたかについて検討することが本稿の目的である。

１．ニーチェ主義論争としての美的生活論争

（１）美的生活論争の勃発

美的生活論争の前史として位置づけられるのは、高山樗牛がツィーグラーに依拠して執筆したニーチェ論「文明批評家としての文学者（本邦文壇の側面評）」である。1901年1月刊行の『太陽』誌上に発表されたこの論文の中で高山は「吾人は文明批評家（クルツールクリチケル）としてのニーツエが偉大なる人格を歎美するを禁ずる能はず」（高山 1901a、18頁）と述べ、ニーチェ思想に対して全面的な賛同を表明した。また登張竹風もほぼ同時期にニーチェに関する論文や翻訳を相次いで発表し、『帝国文学』誌上などにおいてニーチェ思想の意義を強調していた。しかし、これらのニーチェ論にはさほど大きな反響もなく、後にニーチェ主義を批判することになる坪内逍遙や長谷川天渓[註6]からも特段の反論はなかった。

高山の「美的生活を論ず」が『太陽』に掲載されたのは1901年8月のことである。この中で高山は「人性本然の要求を満足せしむるもの、茲に是を美的生活と云ふ」（高山 1901c、34頁）と述べ、本能の満足こそが美的生活にほかならないと主張した。これに対して即座に反応したのは長谷川天渓である。長谷川は「美的生活とは何ぞや」と題した一文を『読売新聞』に寄せ、「敵を見て逃げ出す人」や「色情の奴隷が、異性を追ひ廻す」行為を例示した上で（長谷川 1905、344頁）、「高山君は果して此等の例をも美的であると承認せらるゝであらうか」（前掲書、345頁）と疑問を投げかけた。これが美的生活論争のはじまりである。

ただ、注意しておきたいのは、高山も長谷川もこの時点ではまだニーチェの「ニ」の字も出していない点である。美的生活論争がニーチェ主義論争の様相を呈しはじめたのは、高山と親交の深かった登張竹風が1901年9月、『帝国文学』に「美的生活論とニイチエ」を発表してからである。この中で登張は、「高山君の「美的生活論」は、明かにニイチエの説にその根拠を有す」

（登張 1901e、121頁）と述べ、「美的生活を論ず」とニーチェ思想とを結びつけた。長谷川天渓から論駁されていた高山を擁護するために登張が横やりを入れたかたちである。

これを受け、長谷川は同月『太平洋』に「無用の弁（帝国文学記者に物申す）」を寄せ、「高山君がニーチエであらうか、何であらうが、何か憑拠とする所あつて論述されたにもせよ、吾輩は、同君の論文其物に就いて、卑見を述べたばかりのことである」（長谷川 1905、352-353頁）と前置きした上で、「彼の人は何の説に拠つて、其を隠家としたのだ、などと横から口を出すのは、寧ろ高山君を侮辱した者と謂はねばならぬ」（前掲書、353頁）と登張を非難した。

これに対して登張は1901年10月刊行の『帝国文学』に無署名で「解嘲」と題する一文を発表し、この中で「天渓はニイチエを知らずと公言せる人なり。ニイチエを知らざる人に向てニイチエを説く、これ豈に最も有用なる弁にあらずや。」（登張 1901f、102頁）と応酬した。一方の長谷川は、同月『読売新聞』紙面に掲載された「ニーチエ主義と美的生活」において「自身の見たるニーチエ哲学は、美的生活を説明するは、全く不足のものであることを録し終つた」（長谷川 1905、373頁）と述べ、ニーチェ思想と美的生活論とのズレを指摘した。

（２）坪内逍遙の参戦ー美的生活論争からニーチェ主義論争へー

美的生活論争が世間の注目を集め、ニーチェの認知度が急上昇することになった決定的要因は、1901年10月12日から11月7日にかけて『読売新聞』に連載された坪内逍遙の「馬骨人言」[註7]であろう。「×××」名義で掲載されたこの連載は、「ニイチェ大師」、「ニイチェ宗の大綱」、「ニイチェは反動の健児にもあらず」、「ニイチェは循俗の驕児たるのみ」、「品性上より観たるニイチェ」、「ニイチェは大勇者？」、「ニイチェ歓迎の真理由」といった見出しからも明らかなように、坪内の批判的ニーチェ論である。

「何事も流行向の事さ。名からして粘（ねん）ばりとニイッチェ〳〵と言はぬと、此のせつの文壇では幅が利かぬげな。自分はニイチェさま信仰でなければ、独逸語も知らぬが、英吉利人の通弁と同国製の蓄音機で、ほんの一二度、知りあひのやうなものになつたから、ちいとばかり魚（と、）まじりの猿真似を申さう。」（坪内 1903、389頁）――「世にも珍しい戯作調ニーチェ論」（杉田、42頁）と杉田が特徴づけているとおり、「馬骨人言」は文学的な手法を駆使した坪内逍遙らしいニーチェ主義批判であった。

登張竹風と長谷川天渓による代理戦争に対しては基本的に静観の構えを見せていた高山樗牛も、『読売新聞』という巨大メディアに連日掲載される「馬骨人言」には我慢ならなかったのであろう。「馬骨人言」連載中の1901年11月、雑誌『太陽』の文芸時評欄に「ニイチエの批難者」という記事を載せ、次のように坪内を痛烈に批判した。「読売に馬骨人言と云ふのを書いて居

る匿名先生があるが連りにニイチエの攻撃をやつて居る。何人にも解し得らるゝ事だけは書いて居るが、超人や、転生などの事になると、流石に俗学者の知解に入り難いと見えて一言も述べて居らぬ。こんな手際でニイチェを批評し得らるものならば、世に批評ほど容易なものはあるまいよ。」（高山 1901d、50頁）また、同欄に続けて掲載された一文「ニイチエの歎美者」では、「我輩はゲーテや、バイロンや、ハイ子や、日蓮や、一世奈破翁を歎美すると同じ様にニイチェを歎美する者である」（高山 1901e、51頁）と述べ、ニーチェ主義者であることを公言した。

「馬骨人言」の連載が終わった1901年12月、『帝国文学』に掲載された「馬骨人言を難ず」の中で登張竹風は、「余は未だ嘗て、馬骨人言の如く嘲罵の悪文字を羅列したるを見ざるなり」（登張 1901h、107頁）と批判し、「あはれニイチエを罵れる諸子よ冀くは先づ心を平らかにして、ニイチエの研鑽を積み、而して後ち捲土重来の勢を以てニイチエの壘に迫り来れ」（前掲書、115頁）として、坪内や長谷川らのニーチェに対する無理解を誡めた。

これに対し坪内は同月、「帝国文学記者に与へて再びニイチエを論ずるの書」を『読売新聞』紙上に発表し、登張に対して「いかばかり君はニイチェヤンなるか」（坪内 1903、479-480頁）と問い質すとともに、次のように忠告した。「竹風君よ、重ねて君に約束す、論の本末を顛倒する勿れ。本論を決して後に末論に移ることを忘るゝ勿れ。予が「馬骨人言」を草せし本意は、あくまでも無道徳主義者（と言はぬまでも遂欲主義者）としてのニイチェの推奨と崇拝、及び其の主義其の物を攻撃するに在りき、換言すれば其の「公然たる無道徳主義（イムモーラリズム）」「絶対利己主義（アブソリュートイゴイズム）」「少数暴横是認説」と世道人心との関係問題なりき。」（前掲書、481-482頁）

坪内の批判に対して登張は1902年2月、「馬骨先生に答ふ」と題する一文を『帝国文学』に寄せ、高山樗牛と同様、ニーチェ主義者であることを自認する。「先生また問うて曰く。汝がニイチエとの関係は如何と。答えて曰く。余は甘んじてニイチエヤンの称を受くべし。然れども、余は寧ろかゝる名誉を与へらるゝほどの才なきを恥ぢざるべからず。余はニイチエを嘆美するものなり、ニイチエを渇仰するものなり。この嘆美渇仰の余は、遂に余を驅てニイチエ主義を鼓吹唱道せしめたるのみ、豈に他あらんや。」（登張 1902b、74頁）――長谷川と坪内によって威丈高に批判されればされるほど、高山と登張は意固地にニーチェ主義を貫き通すという構図である。

登張はさらに続けて論文「ニイチエの影響」を『文学界』誌上に発表し、ニーチェ主義批判者を次のように嘲弄する。「吾国に於けるニイチエ影響に就ては僕未だ之を語るべき地位に立たざるのみならず、その如何をも知るに由なし。さりながら一部青年の渇仰と文芸鼓吹の声の稍々大になれると、学者先生の怒を買へるとは明かなる事実なるものゝ如し。就中最もおもしろきは学者先生のニイチエに対する態度に候。始は超然主義を取りて高く構へ玉ひニイチエ何する者ぞ独逸の哲学者なども彼を云々するものなきにあらずやなど申され、ニイチエ思想の漸く世

に伝はりてその声の益々大になれる時、遽かに事の意外にあきれ玉ひし如く、きょろ〳〵眼恐ろしく、その鼓吹者たる僕等をとらへて、ニイチエに拠りて虚名を博さむとする者なりなど、あられもなき悪口雑言を吐き玉ひたれど、更にその效なきを知り玉ふや、盗人を見て縄をの譬にもれず、周章狼狽して、それザラトフストラだの、やれ道徳発生論だのと騒ぎ狂ひ玉ふなど、さて〳〵御敏捷の段恐れ入り奉る外はこれなく候。」（登張 1902c、189-190頁）――このように、美的生活論争はニーチェ思想それ自体の解釈をめぐるアカデミックな論戦というよりはむしろ、相手陣営の態度や主張内容を相互に攻撃する非難の応酬とでも言うべき論争であった[註8]。

ちょうどこの頃から両陣営の口撃は下火になり、1902年12月24日、高山樗牛が肺結核により31歳の若さでこの世を去ると、美的生活論争それ自体は終結の時を迎えた。

２．周縁から見たニーチェ主義の流行

（１）ニーチェ死後のブーム到来

以上、美的生活論争の中心人物に目を向けることによって明治期におけるニーチェ主義論争の大まかな展開を概観してきたが、ここからは、美的生活論争に直接関与していない周縁人物たちの発言を拾いながら、19-20世紀転換期の日本におけるニーチェブームの様相を明らかにしていきたい。

日本にニーチェが紹介されるようになったのは1890年代半ば頃[註9]からだとされているが、その名前と思想内容が巷間に流布しはじめたのは1900年の秋以降である。たとえば1900年11月に発行された『哲学雑誌』第15巻第165号の「彙報」には、ニーチェに関する次のような記事が掲載されている。「独逸現代の文化に一異彩を放ちたるフリードリッヒ、ニーチェは去る八月二十五日、既に久しく精神的に死滅せる空しき形骸を棄てゝ、逝きて帰らぬ旅路に赴きぬ。文学者芸術家の間に「現代の哲人」と称せられたる奇才は、其名聞漸く盛なる頃には既に癲狂院の孤客となりたる時なりき。彼の生活は既に十数年に於て一段落を告けたり、其間其評論の梓に上るもの所謂五車に満てりといふ、今此訃音に際して世界の騒壇は暫く又此題目に忙しからんか。」（哲学雑誌記者 1900、952頁）――ここには、重度の精神疾患療養の末1900年8月25日に死去したという訃報を契機に世界中でニーチェが話題になるであろうという記者の推測が示されている。

また1900年12月刊行の『慶應義塾学報』第34号にも「独逸の文豪ニーチェ氏（史伝）」という記事が肖像画付きで掲載され、やはりニーチェが遂げた非業の死とともにニーチェブームが到来するとの予感が告げられる。

日英米仏諸国に於てはフリードリヒ　ニーチェの名を知るもの比較的に多からずと雖も、本国独逸に於ては其名声頗る高く、行文の流麗なると思想の奇抜なるとを以て、読書社会殊に青年社会は争ひて其著書を繙閲し、従て之に対するの批評紛々として起り、甲是乙非、真に衆評の帰する所を知る能はざるものあり。発狂以来既に十二年、其間敢て新著を世に寄与する事能はざりしも、本年八月二十五日、ワイマルの地にありて、春秋僅に五十六才を以て黄泉不帰の客となりしや、欧米の文壇は今更の如く其論評の為に忙殺せられんとするの勢あり。公平なる月旦は数年の後を待たざれば得可らずと雖も、ニーチェを以て、将に今月を以て終了せんとする西暦第十九世紀大文豪の一人となすに於ては、何人も異議を唱ふる者なかる可し。（慶應義塾学報記者 1900、45-46頁）

19世紀という時代に対して激しい批判を繰り返していたニーチェが1889年に発狂昏倒し、10年ものあいだ精神の闇を漂泊した後、1900年という19世紀最後の年――まさに世紀末――にこの世を去ったというニュースは、通俗的な興味も含め、多くの人々の関心を集めたであろう。小説家の中里介山（1885-1944）は1906年に出版された著作『今人古人』に「狂か天才か」という一文を掲載し、「嗚呼！然れども、自ら狂に非ずと絶叫せしニイチエその人は終に真正の狂人となりて一千九百年八月二十五日世を去れり」（中里1906、53頁）と述べているが、まさに「狂か天才か」というタイトルが象徴するように、当時ニーチェの評価はまだ全く定まっていなかった。だからこそ、新奇なものを求める青年は異彩を放つニーチェ主義を標榜し、その是非をめぐって賛否両論が入り乱れるニーチェ主義論争が巻き起こったのである。

（2）ニーチェ主義の有害性と危険性

このようなニーチェ主義の流行を快く思わなかったのは坪内や長谷川だけではなかった。周縁に目を向けてみても、ニーチェ思想やニーチェ主義者はしばしば有害かつ危険なものとして批判の対象とされていたようである。

たとえば1901年1月発刊の『中央公論』は「トルストイとニーチエ」という記事を載せ、「ニーチエの持論にして研究の価値あるもの甚だ少しとせず」（中央公論記者 1901、46頁）とニーチェ思想に一定の意義を認めつつ、「然れども又彼が極端なる主我独尊を唱へ、現今の社会を調和せる情愛、友情を嘲罵するが如きに至りては頗る有害危険にして社会の破滅を招き、文化の消滅を来すの恐れあり」（同上）と述べ、ニーチェの極端な個人主義が社会の破滅や文化の消滅を招来しかねない有害危険な思想であると警鐘を鳴らした。

また哲学者の井上哲次郎（1856-1944）も、1902年2月刊行の『巽軒講話集』に「ニーチュエ

崇拝の害」という一文を掲載し、ニーチェ思想の有害性を説いた。以下にその全文を引用する。

> *ニーチュエは、近来独逸に現はれたる人傑であつたに相違ない。併しながら、彼の思想は健全でない。そこで悲むべき末路に遭遇したのである。故に彼の思想が、独逸の青年社会に崇拝せられるといふのが、既に已に怪むべきであるのに、独り独逸のみならず、吾国に於てさへも、近来漸く彼を歓迎せんとするの風を来たしたのは、深く悲むべき事である。ニーチュエの考では弱者を自己の材料に供して、自から人類以上の者にならんとする考で、この目的の為には、如何なる欲求をも成し遂げて差支ないといふ恐るべき放縦の関門を開いたのである。それゆゑ厳粛なる道徳思想の欠乏して居るものは、窮屈なる羈絆を脱して、ニーチュエの開いた、放縦の関門に向つて進まんことを唱出し、之れに応じて起こるものが、次第に増加する有様であるがこれは決して健全なる思想の潮流とはいへぬ。ニーチュエの開いた関門は決して道徳の関門ではなく恐るべき不道徳の暗黒界を開いて彼れに類似の性質を有して居る者をして、この方面に向はしめたのである、思ふに彼の跡を追ふ者は、彼と同一の運命に遭遇する恐がないとは、保証出来ない。（井上1902、346-347頁）*

以上から明らかなように、井上は、「恐るべき不道徳の暗黒界」の扉を開くニーチェの思想がドイツのみならず日本においても歓迎されている風潮を悲嘆し、このような不健全な思想に追随するニーチェ主義者はニーチェその人と同様、重度の精神疾患に苦しめられかねないだろうと警告する。

そもそも井上は『巽軒講話集』の「初編序」冒頭において「我邦の世態人情は最近の三十余年間に於て、前古未曾有の大激変を成せり」と指摘し、「旧来の宗教、倫理、教育等悉く破壊せられ、若くは殆んど破壊せられんとし、之れに引き換へて西洋の思想は急潮の如く、澎湃として侵入し来たり」と述べつつ「是れを我邦目下の災厄となす」として、日本における西洋思想の受容それ自体を非難しているが（前掲書、序1頁）、ニーチェ思想に対する態度はことに厳しい。意図せざる結果だったとはいえ、ドイツにおけるニーチェブームに触れた自らの帰朝談が教え子の高山樗牛らを刺激した結果として美的生活論争が起こったわけだから、ニーチェ批判の厳しさの裏には自責の念が込められているのかもしれない。

ニーチェその人だけではなく、彼を信奉するニーチェ主義者の有害性と危険性もまた、批判の対象となったようである。たとえば、坪内逍遙の教え子で早稲田学派の一人である島村抱月／瀧太郎（1871-1918）は、1902年10月に留学先で論文「思想問題」[註10]を執筆し、ニーチェ主義を厳しく糾弾している。

去りて日本の文壇如何にと御覧あれ。僅かに一部の書一篇の文を読んで之れに会心の所あれば、直ちに全身を之れ呑まれて、其の外を回顧するの余裕を有せず。ニイチエ乃至は美的生活とやらんの事事しさよ。而して世上また今更らしう是れに追随するの徒、尤らしき口吻もて之れに好意の解釈を附せんとするの輩、彼等の前には欧州の思想界が経歴し来たる経験は何の意義もなかるべく、否な恐らく読書嫌ひの彼等はろく〳〵書物をも読まずして、たゞ我が仏尊しとのみ騒ぎ上ぐるものに候ふべし、思ひ来たれば一面のポンチ画場、試みに其の二三を描き候はんか。（島村 1906、322-323頁）

島村はこのように述べた上で、ニーチェ思想をいわば「時勢の産物」として巷間に流布させようとする「贔屓連」、すなわちニーチェ主義者を攻撃する[註11]。島村に言わせれば、そもそも「時勢の産物」とは「病める血にわくバチルス」や「此のバチルスに反して生ずる一種の毒素の如き」ものだから（前掲書、323頁）、ニーチェ主義の流行というのはまさに「贔屓連」によって恣意的に拡大させられた伝染病のようなものである。また、ニーチェ主義者は「口には様々の勝手を言ふに拘らず、哲学たり主義たり道徳たる方面のニイチエを、真正面に生まじめに、其のまだ感じ易い天下の青年に実行させやうと煽動してゐる」が、「現実の世界に行ふべからざるものを行はせんとしてゐる」点においても批難されるべきだという（前掲書、350頁）。

「譬へばモルヒネも薬だといつて分量知らずに呑ませる輩であらう、アルコホルも酒だといつて其のまゝあほらせやうとしてゐる徒だ。それで毒とは人間が付けた名だフゝンなぞと非人間的なことを言つて済ましてゐる連中だ。天下にニイチエを会したるものは己れ一人なるが如く大言して、其の実己れがまづ分量違ひをして、毒にあてられて噪ぐものは彼等だ。」（前掲書、350-351頁）――ニーチェ思想そのものの危険性や有害性もさることながら、島村は、ニーチェを信奉する贔屓連＝ニーチェ主義者たちの煽動活動や感染拡大行為にもはっきりとその危険性や有害性を認めたのである。

３．受容形態としてのニーチェ主義

（１）浅薄な受容スタイルへの批判――ニーチェブームの非学問性――

以上に見たように、ニーチェブームにおいてはニーチェ思想だけではなくニーチェ主義者もまた批判の対象とされたわけだが、その最大の批判点は、ニーチェ思想の受容形態の浅薄さであった。島村抱月も「恐らく読書嫌ひの彼等はろく〳〵書物をも読まずして、たゞ我が仏尊しとのみ騒ぎ上ぐるものに候ふべし」（前掲書、323頁）と描写しているように、ニーチェ主義者

とその追随者には学問研究的な態度が欠落していると見なされていたのである。

たとえば市野虎渓は『中央公論』第17年第4号に掲載された「文芸小観」の中で高山樗牛と並んでニーチェ主義者の代表格と目されていた登張竹風を批判した。市野は登張を「ニイチエアンとして名高く、独乙文学に堪能なりとして令名嘖々たる登張竹風君」（市野1902、76頁）と紹介しつつ、結論部では「畢竟するに吾人は独乙語を読み得と称する人よりにてはなく、ニイチエを解し得る人より其の真価を知らんを望む」（同上）と述べ[註12]、「吾人は門外漢の説法に随喜するを屑しとせざるなり」（同上）として、ニーチェ思想に対する登張の無理解と無批判なその追随者とを痛烈に批判した。

緒方流水もまた1902年6月に出版された『青眼白眼』収録の「掌中翻弄記」の中でニーチェ主義や美的生活論を批判した[註13]。緒方によれば、「ニーチエイズムは其の本家本元の独逸では最早決して新しくない説で、ただ此頃ニーチエ其人が物故した為に、其の人生観が今更らしく回想さるることになつた」わけだが、「ニーチエは哲学家として余りに偏し過た為に多くの欠点を有してゐる」（緒方 1902、43頁）。ところが、「この哲学家の偏見を今頃やつと丸呑みにして、丸で新福音にでも接したかのやう随喜渇仰するのが大学派の一派である」（同上）と緒方は言う。この発言には、偏見に近いニーチェ思想を無批判に「丸呑み」するニーチェ主義者らの受容形態への侮蔑が含意されていよう。

> *樗牛の美的生活論、あれは近頃面白くは読ませたけれど、其の論旨は余程窮してゐる。美的生活とは本能の満足の謂で、その価値絶対する故に美的生活と云ふのである。そして此論文は矢張ニーチエの胎内から生れて来たのだといふ。成程誤て万物の霊長と称せられしより、人は漸く其の動物の本性を暴露するを憚り云々などの言葉には慥かにニーチエの面影がある。けれども、美的生活の論旨に何程の創見があるか。ニーチエの本を読まねば美的生活の真意は分らぬなどと何処かの青二才が吐しをるが、ニーチエの本を読んで初めてニーチエの哲学が分かるほどなら、まだ本統にニーチエが分つたものとはいへぬ。ニーチエを読まぬ前に、ニーチエの極端な思想の根核が自分の思想の一部にあつて、うん、其事か位に叩首いて読むものでなければ真にニーチエを解し得るものといへぬ。本を読んで注入的に受けてまだ消化もしないものを誰々の哲学であるとか、誰々の人生観であるとか標榜する手合に何んで人生の意味が分らう。（前掲書、44-45頁）*

緒方はまず「樗牛の美的生活論、あれは近頃面白くは読ませたけれど、其の論旨は余程窮してゐる」と指摘した上で、「美的生活の論旨に何程の創見があるか」（前掲書、44頁）と高山樗

牛を批判する。「論者は唯言ふ、汝等本能に満足せよと。陳腐なるかな、我等は今更真面目くさつて聴かされやうとは思はぬ。そして、これが自分の創見ではなくてニーチエの受売であつて見れば猶更その人生の研究に疎きに驚く。」（前掲書、47頁）――緒方に言わせるなら、高山の美的生活論はそもそも論旨も陳腐である上に、独自性も創造性も認められない単なる「ニーチエの受売」に過ぎない。また、ニーチェ通を豪語する登張に対しても、ニーチェ思想の真意を十分に理解できていない「何処かの青二才」と誹謗し、未消化のまま字義通りにニーチェの言葉を受け取るだけの表面的なニーチェ受容者として批判した。

このように、ニーチェ主義を象徴する特質のひとつは、「受売」や「丸呑み」とも言うべき浅薄かつ無批判な受容形態であり、ニーチェ主義批判の多くは、ニーチェ思想そのものというよりはむしろニーチェ思想の鼓吹者たるニーチェ主義者とその追随者に向けられていたと言えよう。興味深いのは、こうした表面的かつ通俗的な受容行為ないし盲目的崇拝としてのニーチェ主義がパロディー化され嘲笑の的にもなっていたという事実である。

（２）パロディー化されるニーチェ主義

川柳作家の坂井弁（わかち）（1869-1945）[註14]の狂言「ニイチエ坊大明神」（1902）[註15]は、ニーチェ主義の流行を題材としたパロディー作品であるが、ここではニーチェ主義者らがまるで教祖を崇拝するかのようにニーチェを賛美する様子が風刺的に描かれている。

まず冒頭でニーチェ主義信者は次のように述べる。「これはニイチエ主義の信者でござる、世の中に主義は様々有る中にも、此ニイチエ坊大明神が聞かせられた、美的生活、本能満足の大主義に及ぶ者はござるまい、世の中にヤレ道徳ジヤの宗教ジヤの、倫理ジヤの申いて、堅苦るしい偽善の徒が多いのを憤られて、ニイチエ坊が反抗せられた気焔の宗旨は、洵に予に難有いお宗旨でござる、何はともあれ、一ツニイチエ坊大明神に、願のいたいて身共寡めておるに依ツて一ツ美くしい花嫁を授けて戴かうと存ずる、何かと申す内に是れはニイチエ坊大明神のお社でござる、先づ拝むといたしませう。」（坂井 1902、45頁）――このように、美的生活ないし本能満足を宗旨とするニーチェ主義に心惹かれた信者は、「一ツ美くしい花嫁を授けて戴かう」という願いを抱きつつ「ニイチエ坊大明神のお社」を参拝するが、信心深くないせいか、しばらくすると居眠りをしてしまう。

そこにニイチエ坊大明神が登場し、次のように述べる。「これは隠れもない独逸のニイチエ坊と申すものでおりやる、此頃東洋日本の御国に、身共の信徒がいかう殖えたに依ツて、どうぞ渡航ないたいて呉れいと、高山の樗牛、登張の竹風など申す信徒からの招きに依ツて、まかり越して参ツたが、サテ〳〵美事に花が咲いて、美くしい娘共が楽しげに遊んで居る、イヤ此

御国は洵に我がニイチエ主義の実行されて居る国ジヤ、ヤアこれに一人の信者が眠ツて居る、一ツ呼醒いて呉れう」（前掲書、46-47頁）――「美的生活、本能満足の大主義」というニーチェ主義信者の冒頭の台詞からもうかがえるが、ここでは日本におけるニーチェ主義流行の仕掛け人として高山樗牛と登張竹風の名前が挙げられ、ニーチェブームが一定の隆盛を見せていることも示唆されている。

さて、ここから信者とニイチエ坊大明神の会話が始まる。ニイチエ坊大明神に起こされた信者は「ヤアツ、是れはニイチエ坊大明神でござりまするか、ソレは〳〵忝けないことでござりまする、ニイチエ様、身共未だ独身でござります程に、どうぞ本能満足の御宗旨を味はひます程な美人を妻にお授け下さいお願ひでござりまする」（前掲書、47頁）と直接願いを伝える。それに対してニイチエ坊大明神は、「サレば一ツの細し女を授ける程によう美的生活主義を実行いたいて見るがよろしかろう」（前掲書、47-48頁）と返答し、「これより上野の花見にまゐるならば、美くしい被衣を冠りたる細し女がまゐるであらう」（前掲書、48頁）と予言した上で、「ソレが身共が其方へ授け遣す細し女であるぞ」（同上）と告げる。このお告げを聞いた信者は、「有り難し、忝けなし、南無ニイチエ坊大明神様」（同上）と述べ、何度も礼拝するという流れである。

神社を出て上野に向かった信者は、ニイチエ坊大明神の予言通り被衣を身に纏った女性を見かけるが、強引に被衣を剥ぎ取った女性は「ヲカメ面」（前掲書、49頁）だったため、それに驚いた信者は「これは細し女と思ひの外、個様な醜くい女は、身共トント嫌ひでおりやる、苦々しいことでおりやる」（同上）と言いながら逃げようとする。これに対し女性は、「これはいかな事、ニイチエ坊様よりのお指図、妾はわごりよの妻と定められたもの、ニイチエもサンチエも離るゝことではおりない」（前掲書、49-50頁）と述べ、「ニイチエ〳〵ニイチヤ〳〵、ニイチエ〳〵」と言いながら、信者を「ベタツク心持にて追かける」（前掲書、50頁）。追いかけられる信者は「これは苦々しいことでおりやる、ソコ放しおろう」（同上）と抵抗するが、女性は「ニイチエ〳〵、ニイチヤ〳〵」（同上）としつこく追いかけ回すという落ちである。

坪内逍遙は「馬骨人言」の中でしばしばニーチェ主義の流行を「ニイチェさま信仰」（坪内1903、389頁）や「ニイチェ宗」（前掲書、403頁）と、またニーチェその人を「ニイチェ大師」（前掲書、396頁）や「ニイチェ坊」（前掲書、413頁）、ニーチェ主義者を「ニイチェの信徒」（前掲書、397頁）や「ニイチェ宗徒」（前掲書、413頁）などと呼称しているが、坂井弁もまさにニーチェ主義の大流行を「宗教」になぞらえて描写した。ニーチェ主義の流行がしばしば宗教に喩えられたのは、その崇拝ぶりや主義主張の内容が部外者からは奇異に見えること、また当事者間の影響関係が洗脳さながらに強いことなど、教祖と信者との関係に類似した点が見られたか

らであろう。少なくとも坂井弁の狂言「ニイチエ坊大明神」は、高山樗牛と登張竹風によって唱導されたニーチェ主義を完全に戯画化し、本能満足を宗旨とする浅薄な信仰として嘲笑した作品だと言えよう。

４．ニーチェ思想の学問化

（１）吉田静致の1899年論文「ニーチュエ氏の哲学（哲学史上第三期の懐疑論）」

「所説過激、又中正を得ずと雖も、真を穿ち得たる所なしとすべからず、奇警の言を説くに勁抜の文辞を以てす、彼を目するに所謂哲学者とせば或は取るに足らざらん、之を以て文学者となし散文詩の作家とせば彼の名は永世不湮ならんか。」（哲学雑誌記者 1900、954頁）――『哲学雑誌』第15巻第165号の「彙報」にもこう記されているように、当時のニーチェは哲学者よりもむしろ文学者や作家として認知されており、そのことがニーチェ主義の流行拡大を生む要因の一つとなったことは間違いないだろう。ニーチェ主義の流行は、まさにニーチェ思想の非学問性を象徴する社会現象だったのである。

しかし、こうした通俗的なニーチェブームの背後で、非学問的なニーチェ思想をアカデミックな視座から解釈しようとする試みも行われていた。たとえば吉田静致はニーチェがまだ生きていた1899年1月発刊の『哲学雑誌』第14巻第143号に「ニーチュエ氏の哲学（哲学史上第三期の懐疑論）」と題する論文を発表し、ニーチェを懐疑論者と特徴づけながらその思想を哲学史上に位置づけている。

吉田によれば、「懐疑論者は常に古思想を破壊して其の後に至る学者をして新思想を建設せしむるところのものとなり所謂両思想間の橋梁となるもの」であって、「懐疑論者の功蹟は此点に存し歴史的の意義は此の点に存す」わけだが（吉田 1899、64頁）、ニーチェの思想にはまさにこのような意義が認められるという。

> *然るに今や泰西に於て偉大なる懐疑論者の出でゝ学者社会の注目を惹くものあり。之を誰とか為す曰く独逸のニーチュエ氏即ち是なり。聞く彼は当時癲狂症に罹り居ると。されど其の既に公けにせし著書は大に世人の注目を惹きて之を愛読するもの頗る多し。古代Sophistenがソクラテスを喚起し近世ヒユームがカントを喚起せしが如くニーチュエの懐疑的思想が如何ぞ偉大なる哲学者を喚起して前人未開の一新問題を提出せしめさるを知らんや。（同上）*

このようにニーチェを哲学史上に位置づける吉田は、「ニーチュエの懐疑は哲学歴史上に第三の革新を与ふへきものにして彼のSophistenヒユームと併行して歴史的意義を有すへきものなるべし」（前掲書、65頁）と述べた上で、「かゝる意義あるを以て予は軽々にニーチュエの哲学を看過するを欲せず」（同上）との見解を示し、最終的にはニーチェ哲学を「形而上学的思想の一転すべき時期を作るもの」（前掲書、75頁）として高く評価したのである。

高山樗牛のニーチェ論「文明批評家としての文学者（本邦文壇の側面評）」が『太陽』誌上に発表されるのは2年後の1901年1月だから、吉田の先見性には目を見張るものがあると言えよう。むしろ美的生活論争に端を発した賛否両論入り乱れる激しいニーチェ主義論争を経験する前だったからこそ、ニーチェ主義者らの存在に惑わされず冷静なニーチェ論が書けたのかもしれない。

（２）桑木厳翼の1902年著作『ニーチェ氏倫理説一斑』

ニーチェ思想の学問化にとって無視できないのが桑木厳翼（1874-1946）の存在であるが、とりわけ1902年8月に出版された『ニーチェ氏倫理説一斑』は注目に値する著作である。なぜなら本書は、倫理観に関する記述にとどまらず、ニーチェの伝記的事実やニーチェ思想の時期区分、『ツァラトゥストラ』の詳細な解説、ニーチェ思想の批判的検討など、この時期にしてはかなりバランスのとれたニーチェ論となっているからである。桑木自身は「此の書は決してニーチェ研究の結果などゝいふ程のものでない」（桑木 1902、7頁）と謙遜しているが、この『ニーチェ氏倫理説一斑』は間違いなく日本におけるニーチェ研究史の序章を飾る記念碑的著作である。

（a）ニーチェブームとの距離：ブームの客観的描写

本書の第一の特徴は、ニーチェ主義論争から一定の距離を取り、ニーチェブームそのものを客観的に描写している点である。桑木は『ニーチェ氏倫理説一斑』の「緒言」で日本におけるニーチェブームについて次のように述べる。

> *近来我国に於て、ニーチェの名が喧しく伝称せられるやうになりましたが、元来ニーチェの名は其の以前から聞えて居つたので、今から六七年前解説者は、帝国大学でケーベル教師が哲学史を講ぜられた時に、ニーチェの哲学といふのを講ぜられて、其文章は巧妙であるけれども、其の説は極端な利己主義で、排斥すべきものであると、いはれたのを記憶する。当時大学の図書館にもニーチェの著書が二三種蔵せられてあつて、我々の友人の中にも、これを繙読するものがあつた。其れから二三年の後、井上哲次郎博士が独乙からかへ*

られて、彼の国ではニーチェが非常に流行すると唱へられて一時我々仲間の談柄となつた。其の時、大学の卒業論文の一としてニーチェの哲学といふ課題を与へられた。たしか富尾木文学士が此の題の論文を書かれたと記憶する。又、其の頃吉田静致学士が、哲学雑誌で、ニーチェの懐疑説を紹介したことがあつた。又、其の頃或は少しおくれて、早稲田学報で長谷川天渓氏が、西洋の雑誌の翻訳で、ニーチェの学説を紹介した。其の後独乙に留学する人、例へば大西博士だとか、又は他の人達が、折々の通信などに其の名を紹介せられたことがあつた。彼れ是れする内に一九〇〇年ニーチェは遂に歿せられたが、その頃から我国の学界にても、ニーチェの名は著しく唱へられるやうになつた。即ち「太陽」には高山博士が書き「帝国文学」には登張文学士が書き、丁酉倫理会では中島徳蔵君が演説し、読売新聞には坪内博士の評論が顕れ、其他雑誌で、紹介し批評する者が沢山あつて、一時甚だ喧囂を極めた。我国でのニーチェ流行の歴史は大略かくの如くであつた。（前掲書、1-2頁）

井上哲次郎、吉田静致、長谷川天渓、高山樗牛、登張竹風、坪内逍遙ら、本稿で触れた重要人物の名前も取り上げられており、日本におけるニーチェ受容史の草創期が同時代人の視点で的確に説明されていると言えよう。ニーチェが死んだ1900年以降にニーチェブームが本格化したこと、読売新聞で坪内逍遙が「馬骨人言」を連載してから論争が喧噪を極めたことなどについても、本稿の見方と一致する。

ニーチェ論争に自ら飛び込むことなく、賛否渦巻く喧噪から一定の距離を確保し、ニーチェブームを客観的に分析描写できた要因の一つは、日本よりも10年ほど早く興った1890年代ドイツのニーチェブームを桑木が知っていた点にも求められよう。実際、「ニーチェ流行の事実」と題した節において桑木は次のように述べている。

「ニーチェの学説は、ニーチェの出でたる独乙に於ては、もとより非常に流行したもので、今日でも然（サウ）であらう。それはニーチェに関する著述が極めて多いことで証明されますし、又、独乙大学教授の講義にしば〳〵上る（賛成とは限らぬが）のを見ても明に知れる、又、ニーチェの説が独乙の青年に及ぼす感化は非常である。実に著しい。パウルゼンの倫理書によれば、独乙の或る中学校長が訴へていふには、中学生徒の作文が著しくニーチェの文章及び思想に感染して困るといつたと記してある。」（前掲書、7-8頁）――ここには、ニーチェ思想をめぐって賛否両論が巻き起こっていること、ニーチェ思想が青年にきわめて強い影響力を発揮していることなど、美的生活論争を発端として展開された日本のニーチェ論争と同様の特徴を見出すことができる。

また、ニーチェの思想が大流行した原因については、次のように述べている。「かう非常に流行を来した原因は何処にあるかといふに、チーグレルの列挙した所は甚だ穏当である。一八六二年にニーチェの名が始めて現はれてから廿年たゝぬ内に、非常に大流行の哲学者（モーデヒロゾーフ）となつた。これは殆んど類の少いことである。其の原因を尋ねて見るに、まづ外形の上から見れは、即ち先づ文章の上から見ると、ニーチェは実に大なる文章家である。一種の文体の妙を得た人である。即ちニーチェの文章は美麗巧妙で雅致のある文体をもつて居る。」（前掲書、9頁）――このように、桑木はツィーグラーに依拠しつつ、ニーチェの「美麗巧妙で雅致のある文体」が彼を「大流行の哲学者」に伸し上げた原因の一つと分析する。桑木はニーチェブームをあくまでも俯瞰的に捉えようとしているのである。

（b）ニーチェ思想に対する学問的評価：客観的かつ批判的な検討

しかし、本書の結論部で桑木は「特に一言附加へて置きたい」と前置きし、「日本でニーチェ主義を主張せらるゝ文学者は、之によつて連りに哲学科学の研究に従事し、倫理教育の問題に苦心する人々を嘲罵して居られる様である」と述べた上で、「今日我邦で最も排すべきは、頑迷固陋の伝説保存主義や、短気で粗暴な達観主義である」と指摘する（前掲書、191頁）。桑木の見るところによれば、ニーチェ主義者の論難は妥当性を欠いているのである。

「敢て告ぐ、世の文学者よ、ニーチェ主義者よ。何故に其の一味徒党を嘲る暇を以て、共に人文発達の沮害を除くことに力を盡さぬのであるか。我々はニーチェの煩悶に同感するが、其徹底した様な断定に一致することが出来ぬ。我々は煩悶に煩悶を重ね、其間に漸次に理想を実現しようとするのである。悪く徹底した保守家、無理想家は、諸君と我々との、共に敵とすべき所ではないか。」（前掲書、191-192頁）――ニーチェ思想を無批判に丸呑みし、安易な断定口調で論敵を嘲罵するようなニーチェ主義者の行為は、少なくとも桑木に言わせれば、ニーチェ思想との正しい向き合い方ではなかったのである。

桑木は『ニーチェ氏倫理説一斑』の「緒言」でこう述べる。「ニーチェは悪人ではないが、悪人の好みさうな説を吐いて居るといふ点から、ニーチェの学説も、倫理研究者に取つては、一の欠くべからざる参考である。従つて之に関する解説書を作るのは、無益の事ではあるまい。ニーチェも少し位は研究をしても差支はなからう。」（前掲書、5頁）

桑木が考えた正しいニーチェ思想との向き合い方は、端的に言えば、ニーチェ思想を冷静かつ客観的に研究するということ、すなわちニーチェ主義者とその批判者が繰り広げたニーチェブームの喧噪から距離を取り、ニーチェ思想の学問的意味を――まさに熱狂的崇拝と感情的非難の彼岸で――批判的に検討することであった。もっぱら通俗的な関心を集めていたニーチェ

の思想をあくまでも研究対象として取り扱った点に、本書の第二の特徴が認められよう。

では、桑木はニーチェ思想を具体的にどう論じたのだろうか。たとえば超人思想に関しては次のように述べている。「ニーチェのいふ超人などは、現在の状態を顛倒しようといふのであつて、これは到底空想であるに過ぎまいと思はれる、全体誰が超人や天才になるのであるか、ゲーテが言つた通り「汝は如何なる点で常人と異なりなどと言ふか。」自分で天才であるなどゝ自覚したら、この闕典の多い人間でありながら、自分免許で天才や超人となつたなら、気の毒な事には彼は最早癲狂院の一客とならねばならぬ。かやうな実際ない超人も一種の詩としては興味があるが、人生の理想としては、割合に価値のないものであると思ふ。又、人生の理想を説く倫理学者や、哲学者が、着実なる経路を取つてをることを、自己の空想主義によつて非難することは、誤つてるではあるまいか。」（前掲書、186頁）――このように、桑木は超人を「空想」や「一種の詩」と捉え、倫理学や哲学が説くような人生の理想としての価値は超人には認められないと否定的に評価した。

もっとも桑木によれば、ニーチェの思想には「昔の伝説に盲従しないといふこと」（前掲書、187頁）など評価すべき点もあり、「よく解釈して見れば、今の学者と異つた所はなく、敢て奇とするには足らぬものである」（前掲書、186頁）。しかしながら、ニーチェの主張はどれも「倫理の一方面から見てさういふ」（同上）だけであって、倫理学者としての要件を満たしているとは言えない。「ニーチェの説は誤つては居らぬ。しかしたゞ一方面に限つてるものであることを忘れてはなるまい。」（前掲書、187頁）――ニーチェ思想それ自体が哲学や倫理学として完成されているわけではないが、示唆に富む内容が含まれていることもまた事実である。だからこそニーチェ主義者のように無批判に丸呑みするのではなく、ニーチェ思想を批判的に検討してその学問的価値を見定めることが重要だというのである[註16]。

桑木は『ニーチェ氏倫理説一斑』の結論部で次のように述べている。「全体を総括していへば、我々はニーチェによつて、学ぶことがないとはいへぬ。その進歩を貴ぶ精神、忌憚なく自己の説を唱導した態度、奇抜な文章など、実に人々の意を動かすに足るものである。我々は彼を以て、全く邪道であると見倣（ママ）すことは出来ないが、彼のいつてをることは、もとより、あまり珍しいことでもなく、倫理学者哲学者に取つて貴いといふほどのことでもない。それが極端に言表はしてて、多少面白い所があるからとて、其の誤謬弊害があり〳〵知れ切つて居るのに、これを鼓吹するといふのは、許すべきであらうか。その上、これを新説を出したのだとして、他の哲学や倫理に対して、不正当な解釈を下すものがあるならば、我々は極力、その暴を責めなければならんです。」（前掲書、190-191頁）

このように、桑木は結論部においてもニーチェ主義者の浅薄なニーチェ受容行為を批判して

いる。流行作家の過激な発言を丸呑みして随喜渇仰するだけのニーチェ主義者の存在が、かえって冷静かつ客観的なニーチェ思想の検討の必要性を認識させ、結果的に桑木厳翼というニーチェ研究史上の先駆的存在を輩出することになったのである。

（３）ニーチェ研究の萌芽

(a)『ニーチェ氏倫理説一斑』に対する反響

桑木の『ニーチェ氏倫理説一斑』は大きな反響を呼んだ。たとえば1902年10月発行の『哲学雑誌』第17巻第188号には次のような彙報が掲載されている。

> *〇ニーチエ氏倫理一斑*
> *この書は育成会の出版に係る続倫理諸解説の一にして桑木文学博士の著なり。初めにニーチエの略伝とその重（ママ）なる著書とを挙げ、然る後にその学説の大体を説明し、更に有名なる「ツアラトストラ」の梗概を挙げ、之に穏健なる批評を加へたり。附録にはニーチエとドイツセンなる一篇を収む。近時ニーチエの名世に喧伝せらるゝに及びて、その説を能くも了解せずして褒貶の言を為すもの多き中に此の如く忠実なる研究の餘に成れる著あるは甚だ喜ぶべきことゝいふべし、更に再読の上多少の批評を試むることあらん。（哲学雑誌記者 1902、96頁）*

『ニーチェ氏倫理説一斑』の構成と概要を紹介した後、記者は「近時ニーチエの名世に喧伝せらるゝに及びて、その説を能くも了解せずして褒貶の言を為すもの多き中に此の如く忠実なる研究の餘に成れる著あるは甚だ喜ぶべきこと」と述べ、賛否両論渦巻くニーチェブームの喧噪から逃れ、ニーチェ思想を忠実に研究しようとする著作がこの世に出たことを大いに歓迎している。

1902年12月発行の同誌第17巻第190号には「「ニーチエ氏倫理説」を読む」という樋口秀雄の記事がHH名義で掲載されたが、やはりここでも、お祭り騒ぎのようなニーチェ主義の随喜者との対比において『ニーチェ氏倫理説一斑』を出版した桑木厳翼が高く評価されている。

> *奇矯なる彼の学説が好奇心に富める邦人の性情に投ぜしか、はた之を宣伝せるものの言なる文藻、巧なる舞文が、物見たき、気早なる現代の所謂読書界を鼓舞するに適せしかは断じ難かれども、兎にも角にも彼の名、彼の説が一世の読書界に囂然として弄ばれたるは事実なりき。本書の著者が巧に風刺的に穿ちたる「ニーチエ流行の事実」はこれありき。然れども不幸にして吾人はニーチエの研究を見る能はずして、彼が得意なる警句集（アフホリスメンザンムルンク）*

の拔読を見たるに過ぎざりしなり。その宣伝者および随喜者は彼の著書を以て聖典視して、その全集を通読せずんば深甚没涯なる彼の学説、否むしろ説法は解し得べからずとなしぬ。然れども彼等の伝へしところ、はた種本をチーグレル氏の著に限れりと知るに頼ては、吾人はむしろ彼の為に不過を悲むとともに、その所謂研究の態度を悪まざるを得ざりしなり。況んやその喧囂も云はゞお祭り騒に過ぎて、僅かに一星霜を経たる今日に至ては、六百五十回記のお題目に圧し去るゝを見ては、我が学界の為めにうたゝ惆帳のおもひに堪えざるなり。此時に当り桑木氏の「ニーチエ氏倫理説一般」至でぬ。吾人は我が学海に於て始めて現はれたるニーチエ研究の書として、空谷の跫音として、注意と敬重とを以て此書を読みぬ。いでやいさゝか感ずる所を述べて、一は以て著者に応ふるの礼を悉し、一は以て吾人の見を世に問はん。（HH 1902、86-87頁）

樋口によれば本書は「我が学海に於て始めて現はれたるニーチエ研究の書」であって、桑木の最大の功績は何よりもニーチェ研究という分野を立ち上げたことに求められる。「而して吾人の見る所によれば本書は、我が学界に於ける、殆んど唯一のニーチエ研究（倫理説に限ると雖）たりと云ふも不可ならざるなり。此点に於て吾人は深く著者の労を謝し、此書をもて博くニーチエの説を伺はんとする読者に推薦するを憚らず。特に軽卒なるニーチエ唱導者の一部にも亦必読の書たるべしと信ず。」（前掲書、90-91頁）――桑木自身は「此の書を以て敢てニーチェ派の人々に呈することを求めない」（桑木 1902、7頁）と述べているが、少なくとも樋口は桑木のこの著作をニーチェ主義者らに読ませるべきと主張したのである。

もっとも樋口自身、『ニーチェ氏倫理説一斑』に全面的な賛同を示していたわけではなかった。たとえば、1903年1月発行の『哲学雑誌』第18巻第191号に掲載された「「ニーチエ倫理説」を読む（完）」の中で樋口は次のように述べている。「桑木君はニーチエの思想は決して創作的にあらず、斬新の見にあらずしてショペンハウエルの意志形而上学とダーヰンの進化説とを合併せるものにして、学説として彼が毫も加へたる新分子なきが故に第一要約を欠くと為せり然れども吾人の見を以てすれば彼は此両説の調和総合を試みしものゝ如し。少くとも総合せんの意と、総合し得たりとの一家の信念はありしに似たり。不幸その調和総合が不完全なりしが為めにその説や矛盾の塊となり、その結論や不稽に終りしのみ。」（HH 1903、81-82頁）――このように、ニーチェ思想の解釈をめぐって両者は意見の対立を見たのである。

しかし、このような意見の表明や対立は、ニーチェブームの随喜渇仰や誹謗中傷のようなものではなく、明らかに学問研究の領域に属するものだと言えよう。実際、樋口はニーチェ解釈をめぐる見解の相違は別にして、桑木のニーチェ研究とその功績に対しては最大限のリスペク

トを表明している。「吾人は著者の意見に全然同意なること能ざるに拘らず、しかく一時喧しかりしニーチエの説に対し、真摯なる研究を公にせられたる著者の労は深く吾人の認むる所にして又我が学界の為めに謝する所なり。」（前掲書、89頁）

ここに「我が学海に於て始めて現はれたるニーチエ研究の書」に次ぐニーチェ研究史の2頁目が記されることになり、同時に桑木の『ニーチェ氏倫理説一斑』は最初の偉大なる先行研究としてニーチェ研究史上にその名を刻むことになったのである。

（b）ニーチェ思想に対するさまざまな研究上の関心

最後に、吉田静致と桑木厳翼以外のニーチェ論に目を向けてみよう。飯街生は1902年6月発行の『行政法協会雑誌』第5巻第9号に「ニイチエイスムト国家論」を発表し、国家論的な文脈においてニーチェ主義の意味を明らかにしようとした。すなわち彼は「近者余輩は屡ニイチエスムノ語ヲ耳ニス」（飯街生 1902、1頁）としつつ、「世人カ口ヲ極メテ之ヲ論難攻撃スルモ亦宣ナリトイハサルヘカラス」（前掲書、2頁）と述べ、ニーチェブームが世間一般から非難されている現状を把握する。しかし飯街生は続けて「然レトモ余輩ハ窃ニ思フ所謂ニイチエスムナルモノハ今日天下ヲ圧倒シツヽアル国家論ニ対スル憤激ノ声カ奇矯ナル教旨ノ仮装ノ下ニ出現シタルモノニ非サルナキカ」（同上）と問う。こうして彼は「ニイチエスムハ国家論者ノ反省ヲ促カス一箇ノ警鐘トシテ頗ル注意に値スルモノタルヲ覚ユ」（同上）と述べ、国家論者に反省を促す警鐘としての意義がニーチェ思想に認められることを強調した。

桐生悠々は1903年3月発行の『明義』第4巻第3号に掲載された「ニイチエと世界の政策」の中で、文学界にとどまらないニーチェ思想のアクチュアリティを解明しようと試みた。「ニイチエ憤死して、今幾年。人は棺を蓋ふて、名定まりぬといふも、是非相半ばして、未だ真の渠を定めたる者なく、而して偽善者擅に自家の偽善論を唱へ、社会亦擅に此偽善論を容れて、真をいふ者、年を経るに随つて益亡びぬ。さあれニイチエの新楽天観が普く世界の文学に及ぼしたるの影響は、吾人今更めてこれをいはず。然れども、人は猶ほこれをのみ称して、未だ其所見が近世の世界政策に及ぼしたるの大効果を観ず。蓋しニイチエの研究は、概ぬ文章家、文学家によりて為されたるが為也。然れども惟ふに渠は思想界の一巨人也。其いふ所のもの、何ぞ独り文学にのみ限らむや。請ふ、余をして其所見が、広く近世の世界政策に及ぼしたるの影響を論ぜしめよ。」（桐生 1903、50頁）――このように、桐生はニーチェの思想が近世の世界政策に及ぼした影響に注目し、最終的には「力の許す限り、機会の許す限り、其領土の拡張を謀らむとすなる帝国主義、是れ即ち『ニイチエイズム』の変形にあらずして何ぞ」（前掲書、52頁）と述べ、近世の世界政策を象徴する「帝国主義」がニーチェ思想に起因していると指摘した。

1904年7月発行の『哲学雑誌』第19巻第209号に掲載された今福忍の「ニーチェの認識論」は、桑木の『ニーチェ氏倫理説一斑』に触発されて執筆された研究論文である。「ニーチェが夙に芸術家として将た文明の批評家として我邦に紹介せられたるは既でに数年の昔となりぬ。而かも余の寡聞なる、嘗て桑木博士がニーチェ倫理論を公にせられたるの外未だ多く其の哲学思想に関する言説を耳にせず。之れ自ら菲才を顧みずして其の認識論的方面を紹介する所以なり。」（今福 1904、1-2頁）――このように、今福は倫理観を中心に論じられた先行研究から差異化を図り、認識論という新たな視点でニーチェ思想の特質や意味を明らかにしようとした。そして「ニーチェが組織的思索家にもあらず、又た学究的哲学者にもあらざるとは今更ら多く論弁を費すの要なけん」（前掲書、3頁）と述べてニーチェ思想の非学問性を認めつつも、「ニーチェはまた徹頭徹尾懐疑論者なりき」（前掲書、5頁）や「ニーチェの研究法は結局批判主義なり」（同上）などと指摘し、ニーチェ思想の学問的意味を解明しようと試みたのである。

おわりに

本稿では、美的生活論争の周縁に目を向けることによって、論争の中心にいた高山・登張／坪内・長谷川らの発言を相対化し、明治期の日本におけるニーチェ主義の特質と意味を明らかにすることができた。具体的には、①1900年のニーチェの死がニーチェブームの契機となったこと＝宿命的に通俗的関心を集めやすかったこと、②周縁からもニーチェ主義は批判されていたこと、③その最大の批判点は浅薄な受容形態に向けられていたこと＝この受容スタイルは「丸呑み」や「受売」と揶揄され、軽率かつ無批判な崇拝の様子はパロディー作品として嘲笑されてもいたこと、そして④ニーチェ主義の非学問性がアカデミズムの自覚と反省を促し、結果として学術的なニーチェ研究の立ち上げに寄与したこと――これらの諸点を明らかにしたことが、本稿の意義である。

では、明治期のニーチェ主義は教育学にとってどのような意味を有しているのだろうか。たとえば、1914年にニーチェ思想を「個人的教育学」と評価した中島半次郎[註17]は、1905年の著作『戦後の教育』において美的生活論とニーチェ思想とを結びつけ、「殆んど人をして放恣に陥らしむ」（中島 1905、103-104頁）ものとしてニーチェ主義を危険視した。また、ちょうどニーチェ主義の流行期に当たる1898年から1906年にかけて文部省普通学務局長をつとめた教育学者の沢柳政太郎（1865-1927）も、1909年の著作『退耕録』[註18]に収録された「見識ある士少し」と題する一文の中でニーチェ主義の流行を次のように危惧している。

「もし一定の主義を持するものと云へば極端な社会主義であるとか、自然主義であるとか、

ニーチエ主義であるとか、所謂危険なる未熟なる主義である。且つ此種の主義は単に極端である、過激であると云ふばかりでなく、一時的の主義、流行的の主義で、一生を一貫して主張すると云ふが如きものでない。されば旗幟鮮明ではあると云うても、畢竟永続的の性質のないもので、真正の見識から出たものと云へない。此無定見無見識は我国現時の一大欠点ではあるまいか。」（沢柳 1909、189頁）――ここには、ニーチェ主義に対する教育学者の厳しい評価が確認できよう。明治期のニーチェ主義はまさに非教育学的な現象として認知されていたのである。

ニーチェ主義の非学問性が学術的なニーチェ研究分野の立ち上げを後押ししたことは本稿の考察で明らかにしたとおりだが、教育学の場合、事情が異なってこよう。なぜなら、青年世代への影響力という観点から判断して、崇拝や信奉といったニーチェ主義＝ニーチェ思想の通俗的受容という形式的側面のみならず、無道徳主義や絶対利己主義といったニーチェ自身の主義主張＝ニーチェ思想の内容的側面が無視できない論点となってくるからである。ニーチェ思想の非教育学性、とりわけその非教育性とは一体何なのか。また、後に評価されることになるニーチェの教育性はどのあたりに見出されるべきか。

このような問題関心からニーチェ主義を逆照射するとしたら、新たな課題が浮上してこよう。それは、従来もっぱら「文学」の視点から問われてきた美的生活論争そのものを「教育学」の視点で捉え直すという作業である。論争の中心人物である高山樗牛・登張竹風／坪内逍遙・長谷川天渓らは青年に対するニーチェ思想の意味や影響をどのように捉えていたのだろうか。とりわけ教職のキャリアを持つ登張竹風や坪内逍遙はニーチェの思想を教育的な観点からどう評価したのだろうか。この点については次稿以降の課題としたい。

【註】

註１　中島半次郎のニーチェ受容に関しては松原 2020aを参照されたい。

註２　小西重直のニーチェ受容に関しては松原 2022aに詳しい。

註３　篠原助市のニーチェ受容に関しては松原 2020cおよび松原2021aを参照されたい。

註４　長田新のニーチェ受容に関しては松原 2020bに詳しい。

註５　ドイツにおけるニーチェブームの勃興が1890年頃であるから、本国に比べればもちろん遅い反応であるが、通信技術等の時代的制約を踏まえれば、比較的早い反応だったと言えるかもしれない。なお1890年代のドイツにおけるニーチェブームについては松原 2011を参照されたい。

註６　長谷川自身、1899年に『早稲田学報』第30号および第33号において「ニーツエの哲学」を発表しているようだが、現時点でその内容を確認することはできていない。

註７　「標題は「馬ノ骨（ウマ ホネ）、人ノゴトク言フ（ヒト モノイ）」と、斯う手数をかけて訓（よ）んで貰ひたい」（坪内 1903、389頁）と坪内は冒頭でこう述べる。表向きの理由は、どこの馬の骨かもわからないような自分が恐れ多くも一丁前に意見を述べさせてもらうという謙遜の意だとされるが、当然このタイトルはニーチェやニーチェ主義者

たちに直接向けられていると解するのが妥当であろう。

註８　高山・登張と坪内・長谷川のどちらに妥当性が認められるかを検討することは本稿の課題ではない。

註９　西尾幹二の著作『ニーチェ第一部』（1977）や高松敏男・西尾幹二編『日本人のニーチェ研究譜：ニーチェ全集別巻』（1982）によれば、確認されている限りでもっとも早い日本におけるニーチェ受容は、ニコライ神学校が刊行する雑誌『心海』第4号に掲載された1893年の論文「欧州に於ける徳義思想の二代表者フレデリヒ、ニツシエ氏とレオ、トウストイ伯との意見比較」および『心海』第5号に掲載された1894年の記事「ニツシェ氏とトウストイ伯徳義思想を評す」であるという。また筆者自身が確認した限りでは、森鴎外が1896年12月に春陽堂から刊行された『月草』の「叙」の中でヨーロッパの最新思潮に触れ、「今はハルトマンの流行の一面は既に過去に属して、その次にはやつたニイチエの人間以上の人間主義さへそろ〳〵下火になつて居る」と述べている（森 1896、叙6頁）。

註10　「思想問題」は1906年に出版された『滞欧文壇（英国現在の文芸）』に収録されている。なお、奥付の著者名は「島村瀧太郎」となっている。

註11　島村抱月の最大の標的は高山樗牛である。「バイブルを読めばバイブルの口真似し、平家を読めば平家の口真似し、ニイチエを読めばニイチエの口真似し、日蓮を読めば日蓮の口真似するものは彼れなり。日本国小なりといへども、之れを以て一世の預言者とせんには、余りに怜悧ならずや、余りに矮小ならずや、また余りに滑稽ならずや。」（島村 1906、345頁）

註12　「馬骨人言」に憤慨して登張が決意したという『ツァラトゥストラ』翻訳の企図を市野虎渓は次のように批判する。「されど、吾人が竹風君の為に甚はだ遺憾なるは、君が選むでザラフストラを取れることなり。君が「馬骨人言」に憤激して翻訳を企たてられきといふに、生憎や君が余計なる御苦労を費やすまでもなく英訳の現はるゝあり。君が「馬骨人言」の故に心血を注ぎて翻訳に従事せんには、大冊十二篇中の未だ英訳せられぬ部分（悉くとまでにあらずとも）を公にしてこそ、独乙文学に精通する君に、独乙語を知らぬものはニイチエを語るべからずといふ君に、最も相応はしくして最も名誉ある事業なりしものを。」（市野 1902、76頁）

註13　「抑も当代は懐疑の時代であり、人々安心立命の地を得ず、悶へに悶へ、悩みに悩んでゐるのに、我々の為に光明を与へる大いなる思想家は遂に起らぬであらうか。創作界にも論文界にも其れらしき人を見受けぬのみか、似而非小説家や、似而非哲学家の我は顔に振舞ふのを見るにつけ、仮令畸形なりとも此の根底の問題に向つて解釈を与へるのを待ち望むのが今の社会の情である。」（緒方 1902、42頁）――「ニーチエイズム」と題された節の冒頭で緒方は時代状況をこのように特徴づけ、「然るに此に一つ余り香ばしくないニーチエイズムと云ふものが紹介さるることになつた」（前掲書、43頁）と述べる。

註14　坂井弁の本名は阪井弁であるが、他にも、酒井弁、徒然坊、阪井久良岐などとも名乗っていたようである。なお作家としての名義は主に阪井久良伎だったようである。

註15　坂井弁の狂言「ニイチエ坊大明神」については従来ほとんど看過されてきたが、近年、清松大の論文「戯画化されるニーチェ：「滑稽」と「諷刺」の模倣」（清松 2022）において取り上げられた。

註16　桑木はニーチェの学問批判を批判している。「彼は研究的学問を非難してをる。（…略…）しかし、研究を離れては学問は出来るものでない。本来学問は独断的の事に反対して起つたものであるから、絶えず疑ひ、絶えず進んでゆくものである。然るに、その疑が多いといふので、学問を非難するといふのは、間違がつてをる。」（桑木 1902、189頁）

註17　中島半次郎は1900年9月に早稲田大学の前身である東京専門学校教授に着任し、1906年まで教育史や教育学を担当したという。つまり、中島はニーチェ主義が流行していた時期に早稲田派だったのである。

註18　沢柳によれば1909年著作『退耕録』という書名の由来と出版経緯は以下のとおりである。「官遊十数年その間時に已むことを得ずして論じたることあるも、累を公職の上に及ぼさんことを恐れ、腹ふくるゝ心地を忍んで、言はんと欲する所を盡くさざりしこと少なからず。今や退て身体を養ひ心田を耕すに余念なく、悠遊自適す。言論に由つて罪を江湖に得ることあるも累を他に及ぼすの虞あるなし。」（沢柳、序2-3頁）

【参考文献】

飯街生 1902「ニイチエイスムト国家論」『行政法協会雑誌』第5巻第9号、1-5頁。
市野虎渓 1902「文芸小観」『中央公論』第17年第4号、74-76頁。
井上哲次郎 1902『巽軒講話集』博文館。
今福忍 1904「ニーチェの認識論」『哲学雑誌』第19巻第209号、1-49頁。
緒方流水 1902『青眼白眼』星光社。
長田新 1931『教育思想史』岩波書店。
清松大 2022「戯画化されるニーチェ：「滑稽」と「諷刺」の模倣」国際日本文化研究センター編『日本研究』第64集、91-106頁。
桐生悠々 1903「ニイチエと世界の政策」『明義』第4巻第3号、50-52頁。
桑木厳翼 1902『ニーチェ氏倫理説一斑』育成会。
慶應義塾学報記者 1900「独逸の文豪ニーチェ氏（史伝）」『慶應義塾学報』第34号、45-50頁。
小西重直 1917「ニイツエの学制論」京都哲学会編『哲学研究』第16号、56-74頁。
坂井弁 1902『文壇笑魔経』文星社。
沢柳政太郎 1909『退耕録』丙午出版。
篠原助市 1922『教育辞典』宝文館。
島村抱月 1906『滞欧文壇（英国現在の文芸）』春陽堂。
杉田弘子 2010『漱石の『猫』とニーチェ―稀代の哲学者に震撼した近代日本の知性たち―』白水社。
高松敏男・西尾幹二編 1982『日本人のニーチェ研究譜：ニーチェ全集別巻』白水社。
高山林次郎 1901a「文明批評家としての文学者（本邦文壇の側面評）」『太陽』第7巻第1号、17-25頁。
高山林次郎 1901b『文芸評論』博文館。
高山林次郎（樗牛生）1901c「美的生活を論ず」『太陽』第7巻第9号、33-39頁。
高山林次郎（樗牛生）1901d「ニイチエの批難者」『太陽』第7巻第13号、50-51頁。
高山林次郎（樗牛生）1901e「ニイチエの歎美者」『太陽』第7巻第13号、51頁。
中央公論記者 1901「トルストイとニーチエ」『中央公論』第16年第1号、46-47頁。
坪内逍遙 1902「我が現思想界の通弊」『中央公論』第17年第4号、8-10頁。
坪内雄蔵 1903『通俗倫理談』冨山房。
哲学雑誌記者 1900「ニーチェ（彙報）」『哲学雑誌』第15巻第165号、952-954頁。
哲学雑誌記者 1902「彙報―ニーチエ氏倫理一斑―」『哲学雑誌』第17巻第188号、96頁。
登張信一郎 1900a「独逸の輓近文学を論ず」『帝国文学』第6巻第5号、21-34頁。
登張信一郎 1900b「独逸の輓近文学を論ず（承前）」『帝国文学』第6巻第6号、58-67頁。
登張信一郎 1900c「独逸の輓近文学を論ず（承前）」『帝国文学』第6巻第7号、11-20頁。
登張信一郎 1901a「ニイチエの自伝」『帝国文学』第7巻第1号、127-129頁。
登張信一郎 1901b「フリイドリヒ、ニイチエを論ず」『帝国文学』第7巻第6号、1-11頁。
登張信一郎 1901c「フリイドリヒ、ニイチエを論ず（承前）」『帝国文学』第7巻第7号、8-15頁。
登張信一郎 1901d「フリイドリヒ、ニイチエを論ず（承前）」『帝国文学』第7巻第8号、12-21頁。
登張信一郎 1901e「美的生活論とニイチエ」『帝国文学』第7巻第9号、121-124頁。
登張信一郎 1901f「解嘲」『帝国文学』第7巻第10号、99-109頁。
登張信一郎 1901g「フリイドリヒ、ニイチエを論ず」『帝国文学』第7巻第11号、23-37頁。
登張信一郎 1901h「馬骨人言を難ず」『帝国文学』第7巻第12号、106-115頁。
登張竹風 1902a『ニイチエと二詩人』人文社。
登張信一郎 1902b「馬骨先生に答ふ」『帝国文学』第8巻第2号、69-77頁。
登張信一郎 1902c『気焔録』金港堂。

中里介山 1906『今人古人』隆文館。
中島半次郎 1905『戦後の教育』目黒書店。
中島半次郎 1914『人格的教育学の思潮』同文館。
西尾幹二 1977『ニーチェ 第一部』中央公論社。
西尾幹二 1982「この九十年の展開」高松敏男・西尾幹二編『日本人のニーチェ研究譜：ニーチェ全集別巻』白水社、509-536頁。
長谷川天渓 1905『文芸観』文明堂。
樋口秀雄（HH）1902「「ニーチエ氏倫理説」を読む」『哲学雑誌』第17巻第190号、85-93頁。
樋口秀雄（HH）1903「「ニーチエ倫理説」を読む（完）」『哲学雑誌』第18巻第191号、79-89頁。
松原岳行 2011『教育学におけるニーチェ受容史に関する研究―1890-1920年代のドイツにおけるニーチェ解釈の変容―』風間書房。
松原岳行 2020a「中島半次郎の教育学におけるニーチェ受容とその特質」『九州産業大学国際文化学部紀要』第75号、113-136頁。
松原岳行 2020b「長田新の教育学におけるニーチェ受容とその特質―生の哲学者としてのニーチェ像の意味―」『九州教育学会研究紀要』第47巻、49-56頁。
松原岳行 2020c「篠原助市の教育学におけるニーチェ受容とその特質(1)―1920年代の著作『批判的教育学の問題』、『教育辞典』、『理論的教育学』を中心に―」『九州産業大学国際文化学部紀要』第76号、45-69頁。
松原岳行 2021a「篠原助市の教育学におけるニーチェ受容とその特質(2)―1930年以降の著作『教育の本質と教育学』、『増訂・教育辞典』、『独逸教育思想史』、『教育哲学』を中心に―」『九州産業大学国際文化学部紀要』第77号、63-92頁。
松原岳行 2021b「田制佐重の教育学におけるニーチェ受容とその特質」『九州産業大学国際文化学部紀要』第78号、27-55頁。
松原岳行 2022a「小西重直の教育学におけるニーチェ受容とその特質」『九州産業大学国際文化学部紀要』第79号、1-37頁。
松原岳行 2022b「渡部政盛の教育学におけるニーチェ受容とその特質」『九州産業大学国際文化学部紀要』第80号、1-35頁。
森鴎外 1896『月草』春陽堂。
湯浅弘 2007「日本におけるニーチェ受容史瞥見(2)―ニーチェをめぐる明治期の言説(1)―」『川村学園女子大学研究紀要』第18巻第1号、39-45頁。
吉田静致 1899「ニーチュエ氏の哲学（哲学史上第三期の懐疑論）」『哲学雑誌』第14巻第143号、63-75頁。
Becker, H-J.1983: Die frühe Nietzsche-Rezeption in Japan (1893-1903); Ein Beitrag zur Individualismusproblematik im Modernisierungsprozeß. Wiesbaden.

【付記】

本研究はJSPS科研費JP21K02275の助成を受けたものです。